

ミステリ読書案内

2022. 7. 1 発行元

第371号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

中・高校生にお薦めの本^{その18}

中学生、高校生にお薦めするミステリ本の紹介の18回目。最近は図書館の児童書コーナーなども気をつけて見ている。「小学上級より」と書いてある本でも、大人が読んでも十分に楽しめると思っている。

今回は少し以前の作品を…

毎回本選びで悩んでいるので、最近出た本にこだわらないで、少し前に出た本にも範囲を広げてみることにした。2000年以降に読んだ本は大抵ブックオフに回ってしまったので私の手元には残っていない。ということで、図書館に行って現物を借りてきて、少し読み直してこの文章を書いている。

読み直してみると、内容はほとんど記憶に残っていない。年に400冊～500冊読むとなると、多くの

本の内容は忘れてしまうようだ。一部の印象がかすかに頭の片隅にあるだけ。でも、「お薦めの本」に選ぶ程度の良し悪しの判断は背表紙を見ただけでわかる。

ということで今回選んだ4冊。実力者の手になる作品。これらを読んで更に同じ作家の他の作品にも手を伸ばしてもらえのならばありがたい。世の中には数多くのミステリ作品が存在するので、読み手に感銘を伝えられるぴつたりの作品がきっとあるはず。「これだ!」と思えるものを是非探してみしてほしい。

大崎梢『天才探偵Sen公園七不思議』

2007年にポプラポケット文庫から『天才探偵Senシリーズ』として7冊出ている。『公園七不思議』はその第一作。児童書としての作りになっている。

中心になるのは小学六年生の渋井千。さつき小学校始まって以来の天才と呼ばれ、謎を解く大役をこなす。一緒に行動するのは幼馴染の香奈と信太郎。ちょっと危なっかしい行動も多いけれども…。

『公園七不思議』は、学校の壁新聞の特集テーマとして考えたものだったが、七不思議を調べていくと5年前の宝石強奪事件と結びつくことがわかってくる。事件は半分未解決になっており、公園のどこかに隠された宝石の行方を探す展開になっていく。

内田康夫『ぼくが探偵だった夏』

2009年講談社ミステリーランドの中の一冊として書かれた本。現在は講談社文庫、講談社青い鳥文庫にも収められている。名探偵・浅見光彦の小学五年生の夏の出来事。名探偵最初の事件という設定。女性が苦手な光彦の隣に転校生の本島衣理がやってきた。その日の本の朗読はしどろもどろに…。夏休みになって、軽井沢へ行くと友達の峰男だけでなく、衣理もいた。そこで、妖精の森で女の人が行方不明になった噂を耳にする。興味を持った三人は森の中の緑の館を見に行くと、怪しげな男が地面を掘り始めた…。後の浅見光彦シリーズに登場する面々があちこちに顔を出し、内田ミステリ・ファンには大いに楽しめる作品。

伽古屋圭市『ねんねこ書房謎解き帖』

2018年実業之日本社文庫。大正時代。関東大震災で職を失った石嶺こよりが主人公。方々を歩き回った末、神保町の古書店「ねんねこ書房」になんとか雇ってもらえることになった。店主の根来佐久路はぼさぼさ頭で無愛想な人物。でも、古書販売の仕事の他に回りの人からの「萬相談事」を引き受けているらしかった。本書に収録されている5つの話はいずれも文豪絡みの相談事。第一話が芥川龍之介の『羅生門』。続けて黒岩涙香『幽霊塔』、谷崎潤一郎『秘密』、村井弦斎『食道楽』、永井荷風『ふらんす物語』と進んでいく。本を題材にした謎解き。文学好きの人には特にお薦めの作品。

岡崎琢磨『道然寺さんの双子探偵』

2016年朝日文庫。雑誌『小説トリッパー』に連載したもの4編をまとめた短編集。『珈琲店タレーランの事件簿』シリーズの作者によるレベルの高い物語。舞台は福岡県の中央部にある道然寺。住職は窪山真海。この物語の語り手は若和尚の一海。寺には赤ん坊のころに捨て子として託されたレンとランという双子の中学生がいる。レンは人を疑うタイプの男の子で、皮肉交じりの会話が多い。ランは人を信じるタイプの女の子で現在は不登校気味になっている。でも、この二人は身近で起きた出来事をよく観察し、話をよく聞き、真実を見抜く力を持っている。第一話は消えた香典の話。受付で香典を収めていたプラスチックの箱を誤って蹴ってしまい袋が散らばった。拾い集めている途中で、中身が入っていないものがあることを発見。香典の内袋だけを抜き取ったのは誰かが問題となる。どのような方法で…。人の生き死にに関係するお寺にはトラブルがつきもの。隠された想いなどが微妙に関わって謎が生み出されていくことがわかってくる。